第十九講　古文の読解④

Step 1

一　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

東の京、雲居寺《うんごじ》といふところに、瞻西上人《せんさいしやうにん》といふ人いまそかりけり（いらっしゃった）。智行《ちぎやう》（知識と徳行）ともに備はりて、ひとへにこの世をなん思ひ捨てて（ひたすら現世を関心がないと見放して）、わくかたなく後世《ごしやう》の営みのみにて侍《はべ》りけり（ほかの思いもなく極楽往生のためのお勤めのみを果たしていました）。あるとき、冬なりけるなめり（冬だったのだろう）、けしかる女（怪しげな女）出《い》で来たりはべりて、「あまりに寒くはべり。いかばかりのものなりとも得たまはせよ。」と聞こえはべれば（申し上げましたので）、さこそ寒かるらめと、あはれに覚《おぼ》して（お思いになって）、1着たまへりける小袖をなむ給はりてける。

さて、あくる日、又ありし女（またこの前の女が）来たりて言ふやう、「昨日の小袖は、はからざるに（思いがけなく）、失うてはべり。又給はらん。」と言ふ。やがて又給ひてけり。さてあるべきかと覚すところに（そのようなことがあるだろうか）、又つぎの日、莚《むしろ》ばかり身にまとひて「着物ひとつ給《た》べ。」と言ふやう、この上人(注)心得ず覚して、のたまふやうは、「二度は慈悲をもつて汝《なんぢ》に与へぬ。さのみは身の力なし。2かなふまじ。」とのたまふとき、この女、気あしくなりて、「汝は極まりて心小《ちひ》さかりけり。心小さき人の施《せ》をば、我受けず。」と言ひて、3ふたつの小袖を投げ返して、かき消すがごとく失《う》せはべりけり。上人、(注)化人《けにん》の来たりて、我が心をはかりたまへりけるにこそとて、心のほどを自ら恥ぢしめて、悔い悲しみたまへりけるぞ、あはれに

かたじけなく覚えてはべる。

聖（ひじり）の心のつゆばかりもけがれざりければこそ、澄める月の空曇りする誤りもはべりけめと、かへすがへすゆかしく覚えてはべるぞや。

（「撰集抄（せんじゅうしょう）」より）

（注）

この上人＝「瞻西上人」のこと。「上人」「聖」も同じ人物。

化人＝仏・菩薩（ぼさつ）が仮に人間の姿となって現れたもの。

(ア)　――線1「着たまへりける小袖をなむ給はりてける。」とあるが、「瞻西上人」が身につけていた衣服を「女」に与えた理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　衣服を渡したくはないが、「女」に親切にすることで世間での評判が高まると期待したから。

2　あまりに寒いのでどんな物でもくださいという「女」の訴えを聞き、気の毒に思ったから。

3　初めは怪しいと疑ったが、何も持たず一心に修行に励んでいる「女」の姿に感動したから。

4　しつこく衣服を求めてくる怪しげな「女」の訴えを聞き、もう関わりたくないと考えたから。

(イ) ――線2「かなふまじ。」とあるが、その内容を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「女」が着物を何度も欲しがることに納得できないので、重ねて与えるつもりはないということ。
2 「女」は現世の利益を求めているが、極楽往生を願わなければ助けるつもりはないということ。
3 「女」に目先の施しをすることが、本人にとって真実の救いになるのかわからないということ。
4 「女」の求めに応じたいのに、肝心の与えるべき小袖がなくなってしまい申し訳ないということ。

(ウ) ――線3「ふたつの小袖を投げ返して、かき消すがごとく失せはべり。」とあるが、そのときの「女」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1 「瞻西上人」をだまして小袖をもらったことが、仏の道に反していると心から悔やんでいる。
2 「瞻西上人」が仏の化身であることを知って恐れおののき、自分自身の強欲さを恥じている。
3 「瞻西上人」に小袖を隠していたことを見破られて、ふてぶてしい態度に出ようと考えている。
4 「瞻西上人」の心の狭さを知って失望し、そんな人からの施しは受けないと気分を害している。

(エ)　本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を書きなさい。

1　「女」は、立派な僧と名高い「瞻西上人」の本性を知るために非難したが、澄んだ月のような「上人」の人柄に感動して仏の教えを信じるようになった。

2　「女」は、困ったときには仏にすがるようにという親の教えを守って「瞻西上人」を頼ったが、最初のうちは親切だった「上人」が冷たくなったことに失望した。

3　「瞻西上人」は、着物を何度も求められた一連のできごとが、自分の心を試そうとした「化人」によるものであると悟り、自らの行いを後悔して悲しんだ。

4　「瞻西上人」は、世間との関わりを断って修行に専念していたが、「化人」の行為をきっかけにして自分の心を乱されてしまい、世間の人々を疑うようになった。

□

【神奈川県】

Step 2・3

二　次の文章を読み、後の㈠～㈣の問いに答えなさい。

ある山寺に、徳たかく聞こゆる聖（ひじり）ありけり。年（とし）ごろ、堂を建て、仏作（つく）り、さまざま功徳（くどく）をいとなみ、尊（たふと）く行ひけるが、終（をは）りめでたくてありければ、弟子もあたりの人も、疑ひなき往生人と信じて過ぎけるほどに、ある人にかの聖の霊（りやう）つきて、心得ぬさまのことどもいふ。聞けば、はや天狗（てんぐ）になりたりけり。弟子ども、1思ひのほかなる心地（ここち）して、2いみじく口惜しく思へども、力無く、おぼつかなきことなど問ひければ、不思議のことどもいふ中に、「我、在世の間、深く名聞（みやうもん）に住して、なき徳を称じて人をたぶろかして作りし仏なれば、かかる身となりて後は、この寺を人の拝み尊ぶ日に、我が苦患（くげん）まさるなり」とこそいひけれ。

いみじき功徳をつくるとも、心ととのはずは、かひなかるべし。「今のことなれば、名はたしかなれど、ことさらあらはさず」とぞ、ある人語り侍（はべ）りし。

（鴨（かもの）　長明（ちょうめい）「発心集」より）

（注）聖…僧のこと。
年ごろ…長年の間。
功徳をいとなみ…善行を積み。
尊く行ひけるが、終りめでたくてありければ…立派に修行したが、臨終も見事だったので。
心得ぬさまのことどもいふ…納得のいかないことを言った。
力無く、おぼつかなきこと…どうすることもできず、気がかりなこと。
在世の間、深く名聞に住して…生きている時、周囲の評判をとても気にして。
たぶろかして…だまして。

苦患…苦しみとわずらい。
ことさら…わざと。

Step 2
(一) 文章中の――線部1の「思ひのほかなる」を現代仮名遣いに直して、――部全部を**ひらがな**で書け。

Step 3
(二) 文章中の――線部2に「いみじく口惜しく思へども」とあるが、弟子たちが「口惜しく」思ったのは、聖の死後をどのように想像していたためか。それがわかる部分を文章中から**七字**でそのまま抜き出して書け。

Step 3
(三) 筆者が考えを述べている一文を文章中から探し、その初めの**五字**をそのまま抜き出して書け。

Step 3

(四) この文章で述べられている内容の説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア　徳が高いと評判だったある山寺の聖は、実は天狗だったので、いくら善行を積んでもその甲斐(かい)はなく、かえって人間だったときの記憶に苦しめられることになった。

イ　徳が高いと評判だったある山寺の聖は、生前、善行を積んだが、名声を得ることが目的であったために天狗になってしまい、人に取りついて自分の苦しみを訴えた。

ウ　徳が高いと評判だったある山寺の聖は、生前、人々に尽くし修行をして一生懸命に善行を積んでいたのに天狗になってしまったので、弟子たちはさらに修行に励んだ。

エ　徳が高いと評判だったある山寺の聖は、その名声を妬む人から善行を積んでいたにもかかわらず死後に天狗になったという噂(うわさ)を流され、名誉をひどく傷つけられた。

□

【高知県】

〈Note〉

第十九講　古文の読解④

Step 1

一

解答

(ア) 2　(イ) 1　(ウ) 4　(エ) 3

解説

(ア)「あまりに寒くはべり…得たまはせよ」という「女」の訴えに、「さこそ寒かるらめ」と同情したことが理由である。

(イ)「あるとき」小袖を与え、「あくる日」にも「女」がやって来て着物を欲しがったので与えたところ、「又つぎの日」も「着物ひとつ給べ」と言われ、「瞻西上人」が「女」の行動に疑問を感じるようになったことをおさえる。

(ウ)「女」は「汝は極まりて心小さかりけり…施をば、我受けず」と言っている。これ以上着物を与えられないという「瞻西上人」を、心が狭いと非難し、施しを受けるつもりはないと伝えている。

(エ)「女」が姿を消したあとに「瞻西上人」は、「女」が「化人」で、「我が心をはかりたまへりけるにこそ」と気づき、自分の行いをひどく悔やみ悲しんでいる。

口語訳

東の都、雲居寺というところに、瞻西上人という人がいらっしゃった。知識と徳行ともに備わっていて、ひたすら現世を関心がないと見放して、ほかの思いもなく極楽往生のためのお勤めのみを果たしていました。

あるとき、冬だったのだろう、怪しげな女がやって来まして、「あまりに寒いです。どんなものでもけっこうですのでくださいませ。」と申し上げましたので、さぞや寒いことだろうと、気の毒にお思いになって、着ておられた小袖をお与えになった。

さて、その翌日、またこの前の女が来て、「昨日の小袖は、思いがけなく失くしてしまいました。またいただきたいのです。」と言

う。すぐにまたお与えになった。そのようなことがあるだろうかと思っているところに、そのまた次の日、むしろだけを身にまとって「着物を一枚ください。」と言うと、この上人は納得できないと思って、「一度は慈悲の心によっておまえに与えた。それほど自分に力はない。与えることはできない。」とおっしゃると、この女は、気分を害し、「おまえは極めて心が狭かったのだ。心の狭い人間の施しを、私は受けない。」と言って、二枚の小袖を投げて返し、姿をかき消すようにしていなくなってしまった。上人は、化人が来て、自分の心をお試しになったのだと、自分の心の至らなさを自ら恥じ責めて、悔やみ悲しまれたことこそ、気の毒でもったいないと思っております。

聖の心はつゆほども汚れていなかったからこそ、澄んだ月の空が曇ってしまう間違いもありましたのでしょうと、かえすがえすも慕わしく思われるのです。

Step 2・3

二

解答

㈠ おもいのほかなる　㈡ 疑ひなき往生人　㈢ いみじき功　㈣ イ

解説

㈠ 語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。
㈡ 聖の臨終の様子に、「弟子もあたりの人も…と信じて過ぎけるほどに」とある。
㈢ 最後の段落で、筆者の考えと「ある人」の話が述べられている。
㈣ 「徳たかく聞こゆる聖」が死後、天狗になってある人に取り付き、「なき徳を称じて…作りし仏」であると打ち明け、「かかる身となりて後は…苦患まさるなり」と言っている。

口語訳

ある山寺に、徳が高いと噂される僧がいた。長年の間、堂を建て、仏を作り、さまざまな善行を積み、立派に修行したが、臨終も見

事だったので、弟子もまわりの人も、疑いなく極楽往生した人だと信じていたところ、ある人にその僧の霊がとりついて、納得のいかないことを言った。

聞けば、もう天狗になってしまったということだ。弟子たちは、意外なことだという気がして、たいそう残念に思ったが、どうすることもできず、気がかりなことなど聞いたところ、（僧の霊が）不思議なことをいろいろと言う中に、「私が生きている時、周囲の評判をとても気にして、ない徳をあるように称して、人をだまして作った仏なので、このような身となった後は、この寺を人が拝み尊く思う日に、私の苦しみとわずらいは増してしまうのだ」と言ったことだ。

すばらしい功徳を積んだとしても、心が伴わなければ、それは甲斐がないことに違いない。「今のことなので、（その僧の）名前はわかっているが、わざと明らかにはしない」と、ある人は語ったことだ。